

02・5 知り合ってたった五日で、友達にお泊まりのアリバイ作り頼む事になるなんて思うわけないだろ

とある年の秋。十月八日金曜日。十七時半ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は雨。気温は十六度程度。

今日は、朝からずっと雨。そのせいで、かなり冷える。

場所は、主人公が通う学校『公立 鵜』から徒歩で行けるところにあるショッピングモール『バアドモール 鵜中央店』のBタウン二階休憩スペース。

主人公は今、涼羽と合流し、今度はこの休憩スペースで会話している。

本当ならお店に入りたい所なのだが、一日二回もおやつを注文するとなると、いささかお財布が厳しい。

それから、すぐに移動して買い物もしなければならぬ。

なので、これまた地方のショッピングモール特有の『スペースが空いているので、椅子と自販機を置いて休憩所にしましたよ』というポイントに来て、身を寄せ合っているという訳だ。

〈涼羽〉

「思わぬ展開に、非常に驚いている。

主人公と七緒の関係が進展する事は、涼羽にとっては、もちろん願ってもない事だ。しかし、まさか今日だけでここまで急展開するとは思っていなかったのだ。

しかし、元の口調がおっとりめで感情表現も穏やかなため、そこまで露骨に驚いている風には聞こえない」

……すっごい事になっちゃいましたね」

〈主人公〉

「……おう」

そんな二人は今、離れていた間に起きた事を報告し合ったばかりだ。

その結果出た涼羽の感想はごもつともで、主人公自身、いまだ事態を飲み込み切れていない。

だがやはり、あそこで『ノー』と言うつもりは毛頭なかった。

だから主人公は燃えている。

——ここまで来たら、桐生さんの事、徹底的に理解してやる！
ていうか、あのまんまさよならしたくなかったし。

だって、あんな嫌な目に遭ってるんだ。

『もう大丈夫だよな？　じゃあバイバイ』なんて置いて行けるわけないよ。
だから、このまま後ろ髪引かれる感じになる位なら、一晩一緒に居る事なんてどんと来
いっていいか。

それが桐生さんの願いなら、ますます望むところだよ！

……と、非常に積極的な気持ちになっている。

〈主人公〉

「という事で、すう。協力してほしいんだ。

このミツシヨンには、すうの存在が不可欠なんだよ」

〈涼羽〉

「深く、ゆつくりと頷きながら。

涼羽にとって、主人公に手を貸す事は当然の事である。

むろんそれは、たとえ七緒と無関係の件であつたとしても同じである」

もちろんです。私にも責任ありますしね。

【少し声が弾む。ちよつとワクワクしている。

『アリバイ作り』という言葉を使うのはこれが初めてで、とても刺激的なので』
アリバイ作り。お手伝いさせて下さいっ」

〈主人公〉

「じゃあ。かけるぞ。かけるからな」

〈涼羽〉

「【深く頷きながら。

真面目に返事をしているつもりだが、やはりどこか声が弾んでしまう】
はい。お電話、どうぞ！」

こうして二人は、突如発生した『お泊まりイベント』をより円滑なものにするべく、仲良く嘘をつく事にした。

持つべきものは友達である。二人は広大なショッピングモールの片隅で秘密と罪悪感を共有しながら、多分、今店内にいる誰よりもワクワクしている。

〈主人公〉

「あ、もしもし？ お母さん？」

〈恭子〉

「【明るく穏やかな声で。少し早めに、一息に言う。】

恭子は電話に出る時『はいはい』も『もしもし』も、なぜか二回ずつ言う』
はいはいはいはいもしもしもし。お母さんだよー。

【『お姉ちゃん』とは主人公の事。】

主人公は染谷家の長女なので、こう呼ばれている。

また恭子は、主人公が漫研所属で、毎月部誌の原稿に追われている事、今月も、そろそろ部誌の締め切りが近い事を把握している。

なので、原稿の進捗状況が気になっており、真っ先に尋ねる」

お姉ちゃんどうしたの。原稿終わったー？」

〈主人公〉

「あーっとその。その件なんだけど、実はまだ終わってなくて……」

かくして主人公は母親の『染谷 恭子（そめや きょうこ）』に電話したわけだが、それ

にしてもこの現状は、なんとも情けない。

恭子は第一声からすでに原稿を心配しており、主人公はもはや、これに乗っかるだけでよさそうだ。

つまり、日頃の行いが嘘を助けてしまっているのだった。

〈恭子〉

「『まあ、わかっていたけどね』という感じで。まるで驚いていない。

主人公の原稿がギリギリの完成になるのは、もはや毎月の事なので。

この時点ですでに『主人公は『原稿の進捗が危ういので、今日も久我家に泊まっていだろうか』と頼みに来たのだろう』と想像がついている」

そうなの。大丈夫？ 締め切り月曜でしょ？

【それでもまずは一応、主人公の現状について質問する】

今日は何時に帰ってくるの？ まだ部屋？ それともすうちちゃんち？」

〈主人公〉

「……うん。

で、実は今、すうの家で作業させてもらってるんだけど」

〈恭子〉

「優しく聞き返す。

主人公が、原稿が終わらず、精神的に追い詰められているだろう事を理解しているのです。しかし内心『やはりか』『今月もお泊まりコースね』と思っている」

すうちゃんち？

「優しく尋ねる。

ここで『やっぱり終わりそうもないのね』という言い方をしても追い打ちをかけるだけなので。優しく『終わりそう？』という尋ね方をする」

じゃあ、終わりそう？」

〈主人公〉

「あはははは……。実はそれがちよつとヤバくてさあ。

このままだと、土日全部使っても終わらなさそうで……」

力なくへにやりと笑うと、隣にいる涼羽も同じ顔で笑った。

涼羽の入部以来ほぼ毎月繰り返されてきたこのやり取りは、今月に限って嘘になる。つまり、たとえばこれが先月か来月なら、きっとこうはならなかった。

本当に進捗が芳しくない主人公は七緒の誘いを断っていたかもしれないし、応じたとしても『後日ではどうか』とお願いしていたかもしれない。

月曜日の一件に引き続き、これはとんでもない偶然だ。

ここまで来ると、行方不明のはずのむーちゃんが、実は主人公をこっそり導いてくれている。そんな気までしてくる。

あー。むーちゃん、今頃どこで何してんのかなあ。

月曜日にはわかるのかなあ。

もし今のわたしをむーちゃんが見ていたら、何て言うんだろうなあ。

『それでこそ私のオタクです♪』とまでは思ってくれなくても『意外と悪くないですね♡』って、あの意地悪顔で笑ってくれるかなあ。

〈恭子〉

「【優しく尋ねる。

主人公が、原稿が終わらず、精神的に追い詰められている事を理解しているのです。

しかし内心『やはりか』『はいはいやっぱり今月もお泊まりコースね』と思っている」

やばいの？ 土日全部使ってもきつい？」

〈主人公〉

「うん……。で、あの。だから……」

〈恭子〉

「【優しく返事をする。】

主人公が何を言いたいのかは、もうわかっているのだからいい。わかったわかった。じゃあ今日は、すうちゃんちに泊まるのね？」

〈主人公〉

「……そう！　ごめん！　今日のお皿洗いは、明日に振り替えてちゃんとやるから！」

主人公、ここが電話口である事は理解しつつ、それでも深く頭を下げる。

ここまでの話は、でっちあげもいいところだ。

だがそれでも『恭子に申し訳ない』という気持ちについては、ちゃんと真実だった。

〈恭子〉

「【毎月この調子なので、久我家に申し訳ない気持ちはある。】

だが、電話越しにすっかりしよんぼりしているだろう主人公の事を想像すると、強く言

う気持ちにはなれない」

はい。わかったよ。来月はちゃんと間に合うように描きなさいよ？
すうちちゃんと、すうちちゃんのお母さんによろしくね」

〈主人公〉

「……あ！ すうに代わる？」

〈恭子〉

「【全く疑っていない。】

恭子は今でも『主人公は恋愛に縁の薄い生活をしている』と思っている」

あー。いいわよ代わってもらわなくて。信頼してますから。

明日（あした）帰る時にまた電話して？」

うぐっ。おかあさん、ごめんなさい……。

そんな主人公の胸に『信頼してますから』の一言は、グサッと深く突き刺さる。

ああ、どうか親不孝者の不良娘を許してほしい。

でも、ちゃんと、自分が正しいと思う事だけをしますから。

そう思いつつ……主人公は嘘を重ねていく。

〈主人公〉

「ありがとう。……その、頑張るから！」

それでも、この言葉は嘘ではない。

主人公はこれから、生まれて初めて自分を好きだと言ってくれた女の子についてもっと知るべく、出かけていくのだ。

今頑張らないのなら、いつ頑張るというのだろう。

これから自分がどうなってしまうのかはまるでわからないが……とにかく、ベストを尽くすという気持ちだけは強くあった。

〈恭子〉

「【少し呆れたような声を出しつつも優しく】

はいはい。頑張んなさいね。じゃあお母さんご飯作るから。またねー」

〈主人公〉

「じゃあねー！」

〈恭子〉

「【優しく返事をして、そのまま電話を切る】
はい」

通話終了のボタンをタップすると、隣の涼羽が、再び大きく頷く。

そう。準備はまだ他にもある。これから七緒が退勤するまでの時間に、主人公は『お泊まりセット』を用意しなくてはならないのだ。

——さて。今日という日は、一体どうなって行くのでしょうか。

そんな事を思いつつ、二人は何度も頷き合いながら、休憩スペースを後にした。

ここでフェードアウトして終了。